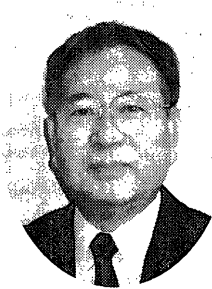




退官によせて：「賢明なる同行の伴侶」：  
『年報いわみざわ』のより一層の発展を

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 潟沼, 誠二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9340">https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9340</a>



## 「賢明なる同行の伴侶」

— 『年報いわみざわ』のより一層の発展を—

潟 沼 誠 二

昭和58年9月15日、私は秋田の「昔っこ」を探訪した足で、県北の山本町へ行こうとしていた。森嶽地区に鎮座する森嶽神社の秋祭りに奉納される歌舞伎を見物しようというのである。

町外れのバス停は、いわゆる「一銭店」の前に投げ棄てられたかのように置かれていた。残暑のきびしさに堪えかねて、私は店に飛び込んだ。アイスクリームでも求めて暑さをしのごうという魂胆だった。店内にはすでに先客がいた。何人かの若い旅人が標準語であたり憚らず大声で話していた。東京から来たらしい。

お婆さんが入ってきた。ガラス張りのボックスから、コーラ瓶を一本取り出すと、

「このコーラへでるべが」

と若い旅人の一人に尋ねた。一瞬、店内は静まり返った。

「いくら何でもコーラ一本ぐらい飲んだって屁なんか出ないよ、お婆ちゃん」

若い旅人がこう答えた時、店内に爆笑が渦巻いた。その笑いは哄笑ではなく、嘲笑に近かった。「ヘッヘッヘッヘッ」とお婆さんの皺くちやの顔はゆがんだ。

「うん、これはへでるよ。へでる」

私はあわててお婆さんに話しかけた。店内は再び静まり返った。

翌年の『年報いわみざわ』（第6号）に、私は創作民話「八郎」に関する論文を掲載していただいたが、その中に、「もし民話に対する理解がまったくなければ、このような方言（注：「八郎」に使われている方言）は、単なる『ものめずらしさ』に終始するだけでなく、方言に対する悔蔑につながりかねない」と書いた。残暑で乾き切った道を、コーラ瓶一本持って、とぼとぼと歩き去った。あのお婆さんをしきりに思い起こしていたのである。

1976年に、フルブライト招聘講師として渡米した。学会や研究会そして授業などの機会を通じて、“English for International Communication”ということが、私にまわりついて離れなかった。タイプライターを打つ手を止めて、困惑したり惘然としたりすることがたびたびであった。無意識のうちに、外国人の既定あるいは固定概念に迎合するような言説を弄してタイプしている自分に気がつく、「あっ、迎合しているな」と思うのである。

私は、授業で「ミシーマ」や「カワバーラ」を取り上げることをやめた。その代わりに、小林多喜二や大岡昇平、島尾敏雄や遠藤周作、庄野潤三や李恢成そして原民喜などを取り上げた。

日本文化についてのノートをタイプで打ちながら、ついつい安易に、R. ベネダイクトの『菊と刀』で説かれている恥の文化のコンテクストに依りかかって説明しそうな時、私は『古事記』を取り上げた。

このような経験は、日本語とは敗戦国の言語だったということを私に実感せしめていた。「日本語教育管見—戦後日米関係のはざま—」の『年報いわみざわ』の連載は、このような体験に基づいて行われた。

敗戦を『オンリー・イエスタデイ』（F. L. アレン）と受け止めることはできずじまいで、結局『敗北を抱きしめて』（ジョン・ダワー）しまうことになってしまった。

ふり返ってみると、『年報いわみざわ』は、私の大学生活と切り離すことのできないところで、私を育ててくれていた。書き進めた連載も、チョムスキーと日本語の関係を序論的に論ずるところで終焉となった。

また『年報いわみざわ』の創刊当時、私自身もまた編集の仕事の一員に加えさせていただいた。『法句経』の中に、

若し思慮に富み、正しく行ひ、賢明なる同行の伴侶を得ば、一切の危難を征服し、熟慮して欣然彼と共に行くべし。

とある。

『年報いわみざわ』が、岩見沢校の「賢明なる同行の伴侶」として、ますます発展されんことを祈りつつ。